

コンテンツ

- P1 概要
- P1 石垣の重要性
- P2 調査地の歴史の変遷
- P2 石垣の検出状況
- P3 石垣の文化財的価値
- P4 出土品

概要

公共下水道中部バイパス第2幹線工事に伴う発掘調査を城内中学校跡地で実施したところ、地下1m付近で東西約10m以上、南北3m以上に亘る平面L字形に積まれた石垣を発見しました。石垣の基底部は、これ以上の掘削が不可能なため未確認ですが、石垣は少なくとも3段以上(1.5m以上)残っていると考えられます。江戸時代の絵図や現存する高松城石垣と照合した結果、高松城東側にあった中堀石垣の南西隅部分に相当することが明らかになりました。そのため、石垣を現状保存し、将来の一般公開に備えることとなりました。

石垣の重要性

- 県民ホール敷地内にある国指定史跡の石垣の延長にあたり、初代高松藩主松平頼重入府後に造られた堀の石垣です。県立ミュージアム建設時にも同様に確認され、その時も石垣を解体復元して保存・公開しています。
- 高松城跡の縄張り(区画)を現在の地図と照合したり、石垣が時代や場所によってどのように構築されているかを研究する上で貴重です。



発見・保存された高松城東側中堀石垣

調査地の歴史の変遷

今回調査した場所は、天正16年(1588)に生駒親正が高松城を築城して以降、その城内に位置していました。生駒時代末期の絵図(図3)では、中堀と外堀に挟まれた場所に位置すると推定できます。この絵図によると、調査地より西側の中堀に面した場所では、生駒左門など重臣達の武家屋敷になっていますが、調査地付近より東は、「いほのたな町」、「ときや町」などの地名が見られ、町人町であったことがわかります。

その後、寛永17年(1640)に生駒家は転封になり、寛永19年(1642)、松平頼重が入封し、その後、高松城は11代にわたって松平家の居城となります。頼重は、寛文10年(1670)に天守を改築し、その翌年から東ノ丸、北ノ丸を新造します。さらに2代藩主頼常の時に、月見櫓や長櫓(うしとらやぐら)が建てられます。またこの頃、三ノ丸に御殿(披雲閣(ひうんかく))が建てられ、大手門が南から南東へと変更されます。

このように大改修された以降の絵図を見ると、調査地周辺の東と北において新たに堀が開削され、広場のような空間となっていることがわかります(図1・2)。堀で隔てられることになったこの広場は、東ノ丸と桜ノ馬場との間が橋で連結されていました。桜ノ馬場側に架けられた橋は、新設された大手門(現在の旭門)に連結しており、同じ位置に今は旭橋があります。つまり、現在の玉藻公園駐車場と旧城内中学校の運動場がこの広場に相当すると考えられます。絵図では下馬や腰掛の記載が見られることから、藩士などが登城する際に馬を下り、待合所に使っていたと考えられます。さらに南東隅には、門や番所も描かれており、武家屋敷地と以東に広がる町人町とを隔てる地点にもなっていたと考えられます。

この景観は、明治時代に入ってもしばらくは残っていたと考えられますが、しだいに堀は埋められ、東ノ丸とともに広場の姿を失っていったと推測できます。

石垣の検出状況

発掘調査では、地下1m付近で、東西方向に並び北に面を揃えた石垣を最初に検出しました。戦後に建設された道路等によって上部は破壊されていましたが、全長約10m分を確認できました。発掘調査を進めていくと、この東西方向の石垣が西端で北方向に折れて、東に面を揃えていることを確認しました。石垣の基底部分については、これ以上の掘削が難しいため

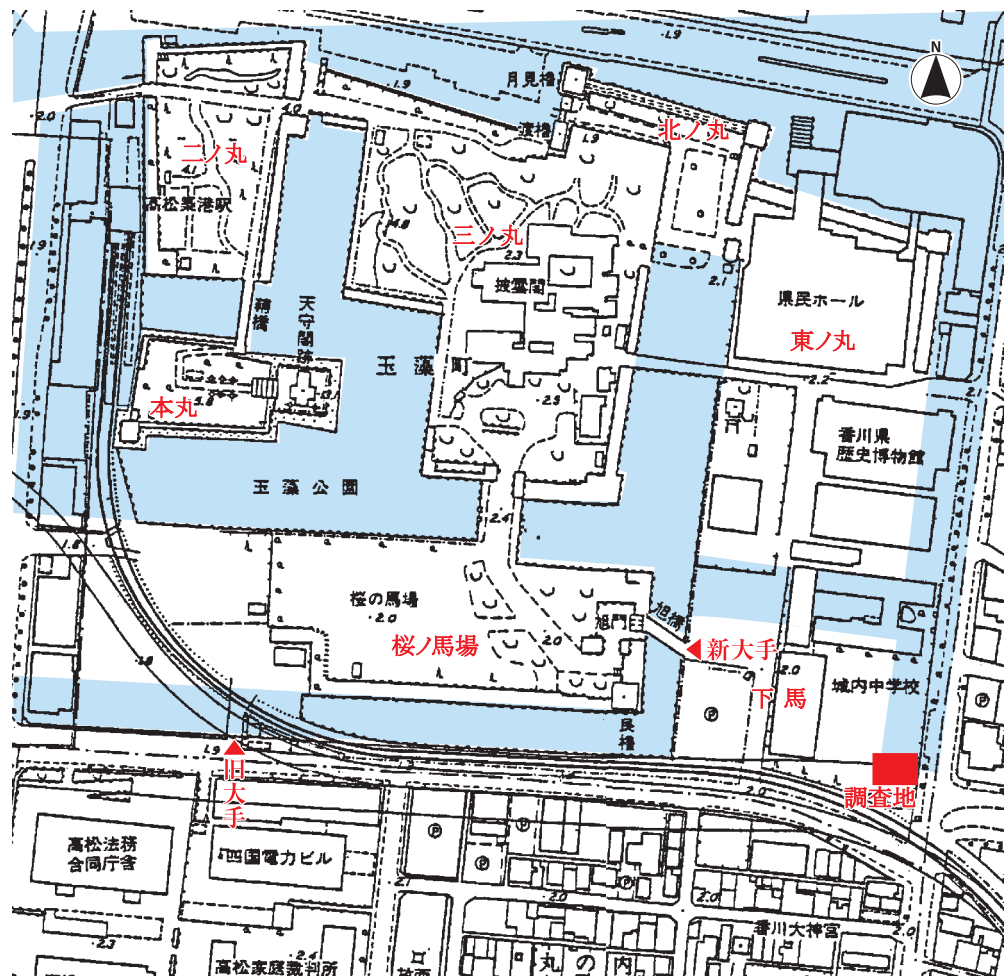


図1 調査地位置図



左写真 北方向と東方向にL字形につづく中堀石垣。北方向になる奥側には、旧城内中学校校舎と県立ミュージアムが見える。

下写真 確認したL字形に折れる中堀石垣の隅部。(東方向から)



高松御城全圖

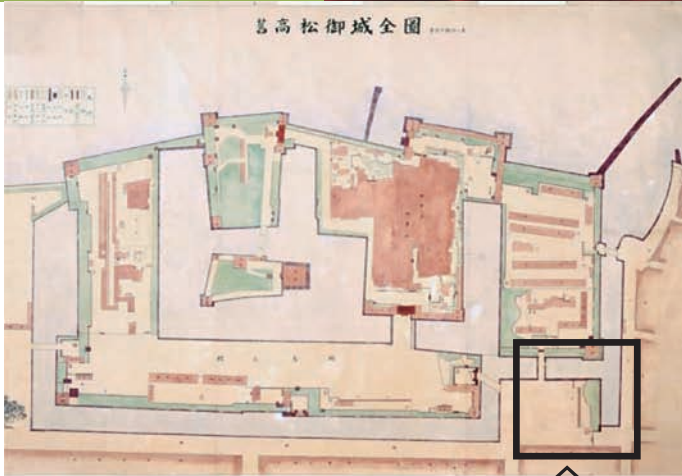
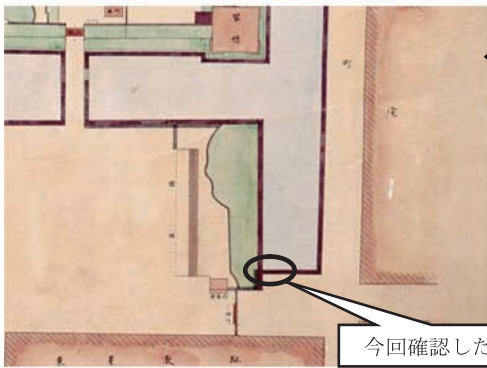
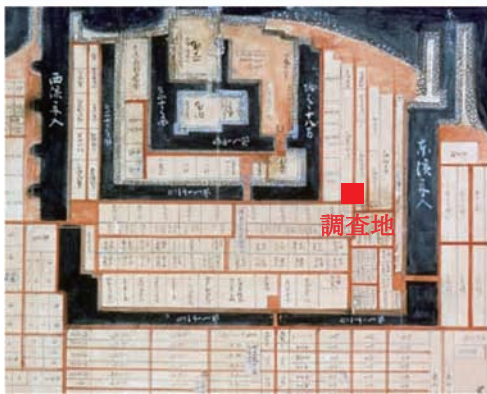


図2 旧高松御城全図
(香川県立ミュージアム所蔵)



今回確認した石垣



調査地

図3 生駒家時代讃岐高松城屋敷割図
(高松市歴史資料館所蔵)
この時には、まだ東側中堀が存在していない。

未確認ですが、現在残されている最上段の石材を含めて、3段以上(1.5m以上)の石材が積上げられていることがわかりました。この石垣は、推定される平面規模と深度から考えて堀の可能性が高く、前述した絵図との対比から、寛文11年(1671)以降に松平頼重が新たに開削した東側中堀の南西端に位置するものと推定できます。石材表面に見られるスタレ状の仕上げ加工が、大手枡形や桜御門など同時期に新造・改変された石垣の特徴と一致することも、中堀の石垣と考える根拠として挙げられます。

石垣の文化財的価値

調査地は高松城の中核部へと繋がる入口にあたり、高松城にとっては重要な位置を占める地点と言えます。今回検出した石垣は、昭和59年に国史跡の追加指定を受けた東ノ丸石垣(県民ホール敷地内)の延長部分にあたります。さらに、県立ミュージアム建設時にも、同じ延長部分の石垣が発掘調査で検出され、解体復元して保存・公開されています。

また、石垣が高松城東側中堀の南西端にあたることから、高松城の縄張りや石垣を研究する上で重要であり、今回検出した石垣は、文化財的価値が非常に高いことがわかります。

このため、この石垣を現状のまま保存することになりました。調査後に、工事等による損傷を防ぐため石垣をいったん埋め戻していますが、工事終了後に公開について検討する予定です。

【用語解説】

生駒親正(1526~1603) 高松生駒家初代藩主、高松城を築城し高松の街を開いた。

生駒左門 生駒家第2代藩主・一正の四男。五千七十石を給される国老であった。

いほのたな町 『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』にある町名。その後の絵図にも魚ノタナ・魚場・魚会所・魚市場などの書き込みがある。後の魚屋町(本町、北浜町に編入され消滅)。

ときや町 『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』にある町名。後、外堀の外に成立した研屋町が、外磨屋町と呼ばれたのに対し、当町は内磨屋町(本町、鶴屋町に編入され消滅)と称した。

松平頼重(1622~1695) 高松松平家初代藩主、寛永19年(1642)2月28日、生駒家転封のあと東讃岐の領主となる。

石垣の化粧

積み上げられた石垣の表面には、美しく仕上げるために表面の凹凸を消し平らにする目的で施された加工の痕を残すものがあります。この仕上げ加工には、2つの種類があることが知られています。鉄製の鑿(のみ)で、細かく点状に打ち欠くものと、スタレのように筋状に削り取る方法です。細かい点状の加工痕は、風化により目立ちにくくなりますが、スタレ状の加工痕については、今回見つけた中堀の石垣のほか、現在の旭門や桜御門付近の石垣にも見ることができます。



上写真 確認した中堀石垣の表面に見られるスタレ状の加工痕

出土品

発掘調査における出土品については、中堀の新設に伴うものと考えられる造成土の中から、地鎮（じちん）に供したと考えられる器類や銭貨の埋納遺物が多く見られます。この地に中堀が造られるまでの江戸時代前半の出土品が多くまとまっていることから、それまで存在した武家屋敷や町屋を取り壊して中堀が造られたと想定されます。

一方、中堀が廃棄された頃と考えられる堀の中の堆積物には江戸時代の終わり頃から20世紀代までの出土品が認められ、廃城以降、手入れが行き届かなくなった堀は堆積が進み、やがて堀は埋められて姿を失ったと推察できます。



右上写真 地鎮の跡と考えられる伏せられた状態で出土した陶器の皿。

右中写真 刀の鍔（つば）の出土状況。

右下写真 中堀が新造されるまでの江戸時代前半に属する土器の出土状況。



編集後記

今回確認した高松城中堀石垣は、地中に埋まっていなければ、現在の史跡高松城跡の一部として国の史跡になっていたと考えられるものです。このようなことから、工事に際しても現状保存が図られることになりました。関係機関ならびに関係者に改めて感謝するとともに、将来、この石垣が高松城の一角として一般公開できることを期待したいと思います。(T.O)

むかしの高松

第24号 2011年1月

編集発行 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
tel 087-839-2660
<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp//886.html>